

第12回「泉大津市オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（最優秀賞）】

毛布の涙

本田 美徳・大阪府寝屋川市

滂沱たる涙を一枚の毛布が救ってくれた。

三・一一東日本大震災。十二年前、私は関西から宮城県気仙沼市に派遣された警察官だった。若い部下数名を引率し、激しい余震が続く中、バスで亀裂だらけの危険な道路を何十時間もかけてひた走り、現地に着いて怪物のような瓦礫群に息を呑んだ。だが本当の試験は被災地に到着してからだだったのだ。

私達が発したのは発災後一ヶ月が経過していて生存者絶望との情報を得ていた。そして、現地で下されたのは遺族支援という任務だった。遺族支援とは安置所に搬送したご遺体を検視の後で納棺し、遺族が行う仮葬儀に立会うことや、ご遺体の特徴と所持品等が書かれた「安否情報」を確認した遺族にご遺体と対面を行う際の寄り添いだった。私達は制服の上に現地で借りた血だらけの簡易エプロンを着けて感染症の恐れも厭わず寄り添った。中学生の娘さんを亡くされたお母様は遺影を抱いて深く頭を下げられ、小学生の息子さんを亡くされたお父様は「違う！これは俺の子じゃないっ！絶対どこかで生きてるっ！」と認めずに号泣された。一人でも救助できた場合は僅かながらも達成感は得られただろう。だが悲鳴、号泣、慟哭が渦巻く安置所にしか現実には存在しなかった。そんな哀しい現場にも、たった一つだけ、安らぎがあった。

夜はバスの中で座って仮眠をとるが、東北の四月は底冷えし、厳しい寒さが襲ってくる。見かねた現地警察の方が幾何学模様が施された赤い毛布を全員に配布してくれた。「パキスタンからの援助物資です。使って下さい」肌触りが快適で新品の良い匂いがする毛布。私達はその毛布を頭から被って寒さを凌いだ。やがて皆で奮い立った。悲嘆に暮れる遺族を想えばこんな寒さぐらい何だ、俺達が寄り添わずに誰かがやるのだと。日が経つにつれ、厳しい寒さに立ち向かうかのように仲間達は使命感を燃やして一致団結していった。

だが、哀しい任務は続く。あれは一体、何十体目のご遺体だっただろう。津波に流された若い男性のご遺体のポケットに遊園地の半券が入っていた。一人の女性が、その男性は遊園

地と一緒にいった婚約者ではないかと訪ねて来られたのだ。彼女は同じ半券を所持している。万事休すだ。棺の中の彼を確認してもらわなければならない。言葉に詰まりながら告げた。「気をしっかり持ってとはいえないです。だけど…できるだけ、できるだけ、元気な彼の顔を思い出して確認して下さい」と。

あの光景は一生涯忘れないだろう。絹のカーテンを切り裂くような彼女の悲鳴が約二十分間も続き、傍らで立ち尽くすことしかできなかった。彼女は私を振り返り、何度も、すみません、と繰り返した。しゃがみ込み、また「いいんですよ。泣いてあげて下さい」とだけしかいえなかった。実は遺族支援をしていて気づいたことがあった。遺族は最初の対面が一番辛いのだ。生きていて欲しいと願っていたのに現実を受け入れることができないからだ。だが、一度対面を果たすと、とにかく安らかに眠ってほしいと願う。だから二回目以降は静かに語りかけられる遺族が多かった。

翌日、彼の家族と共に迎えに来た彼女もそうだった。私に向かって静かにいわれた。「昨日、お巡りさんに、『泣いてもいいよ』っていわれて少しだけ楽になって。彼にも、『泣いてよかったんだよね』っていいました。派遣も終わりなんです。本当にお世話様でした」

思わず奥歯を噛みしめて無言で敬礼を返した。そうしなければ双眸そうぼうから涙が零こぼれていただろう。派遣が終われば私達は日常に戻ることができる。だが彼女は、遺族は、この地で生きて行かなければならない。「泣いてあげて下さい」といった私に彼女は感謝までしてくれた。逆に聞いたかった。「何故、哀しみの極限でそんなに人に優しくなれるのですか」と。それから間もなくこの派遣も終わろうとしていた。

帰任する日。車内から敬礼する私達を東北の遅く花をつける桜と共に、多くの住民の方や現地の警察官達が涙で見送ってくれた。

帰りの車内で眠る際、あの赤い毛布を頭から被つぶって目を瞑つぶった。すると寄り添った遺族の顔が次から次へと浮かんできて、いつの間にか嗚咽している自分がいた。暖かな毛布の中の空気は私の涙と吐息で更に熱くなって気化し、遂には水滴となって顔の上に舞い戻ってくる。そう、まるで毛布自身が泣いているかのように。

毛布の涙。緊張が続いた派遣が終わり、哀憐の極地だったあの安置所での出来事を車内で思い返した。子供さんを亡くされたお母様。辛い中を最後はご遺体を自分の子だと認められたお父様。あの婚約者を亡くされた女性。

毛布の涙の意味がやっと分かった。私に寄り添ってくれていた毛布と一緒に泣いてくれたのだ。そして十二年の歳月を経て、もう一つ分かったことがある。あの東日本大震災で行った遺族支援は任務ではなく、一人の人間としての寄り添いだったということ。